

*manasi-Kṛ*の意味について

—般舟三昧の実践に用いられる場合—

吹 田 隆 徳

1 はじめに

かつて筆者は般舟三昧と仏随念の関係について考察し、その実践は仏を *anu-Smṛ* (随念) するのではなく、*manasi-Kṛ* (作意) するよう説かれると明らかにした (吹田2016)。その際には「作意」ではなく「思念」という訳語を用いたが、いずれの訳語であれ検討の余地を残している。一般的に *manasi-Kṛ* は思考や注意を表す語である。例えば、前者は「如理作意」(*yoniso manasikāra*) という言葉に、後者は経典に見る「よく注意せよ」(*sādhukaṃ manasikarohi*) という定型句に代表される。しかし、Deleanu (2006, 468–470. fn. 6) が指摘するように、*manas(i)-Kṛ* は多義的 (polysemic) な語であり、一般的な訳語があてはまらない場合がある。般舟三昧の場合もこれに該当し、前述の「作意」や「思念」などの訳語を用いると、その意味するところが十分に表現されない。適切な訳語を考察することは般舟三昧の具体的な内容を知る上で不可欠となる。そこで本稿では、般舟三昧の実践に用いられる *manasi-Kṛ* をどのような意味で理解すべきか検討を加える。

2 経典などに見る *manasi-Kṛ* の用例

本題に入る前に、パーリ聖典やアビダルマ論書に説かれる *manasi-Kṛ* について概観しておく。*manasi-Kṛ* には「思惟」あるいは「注意」といった訳語が想定される。以降では本題の考察に先立って、それらの用例を確認する。まず最

初にパーリ聖典における用例から確認する。以下では和訳と原文とを併記するが、先行訳の確認も兼ねて、和訳部分を引用している場合がある。その際には訳の最後に出典を明記してある。

2. 1 思考を表す用例

比丘たちよ、私が悟りを開く前、未だ悟りを開いていない菩薩であったとき、次のように考えた。「本当に、この世間の人々は苦に陥っている。生まれ、老い、死に、死没し、再生する。しかもこの苦を、老死を脱することを知らない。いったいいつこの苦を、老死を脱することを知るであろうか」と。比丘たちよ、そのときわたしは考えた。「何があるとき、老死があるのか。何を縁として老死があるのか」と。比丘たちよ、そのとき、わたしに正しい考察と智慧とによって明らかな洞察が生じた。「生があるとき老死がある。生を縁として老死がある」と。 (浪花 2012, 35, 10-16).

pubbe va me bhikkhave, sambodhā anabhisambuddhassa bodhisattasseva sato etad ahosi kicchaṃ vatāyaṃ loko āpanno jāyati ca jīyati ca mīyati ca cavati ca uppajjati ca. atha ca pan' imassa dukkhassa nissaraṇaṃ nappajānāti jarāmaṇassa. kudassu nāma imassa dukkhassa nissaraṇaṃ paññāyissati jarāmaṇassāti. tassa mayhaṃ bhikkhave etad ahosi kimhi nu kho sati jarāmaṇaṃ hoti. kimpaccayā jarāmaṇaṃ ti. tassa mayhaṃ bhikkhave, yoniso manasikārā ahu paññāya abhisamayo jātiyā kho sati jarāmaṇaṃ hoti. jātipaccayā jarāmaṇaṃ ti. SN2 10, 3-13.

ここに取り上げたのは *yoniso manasikāra* という用例であり、引用した浪花訳では「正しい考察」という訳語が当てられている。この他の先行訳として、片山訳は「正しく思惟し、」と訳す¹⁾。英訳としては、ボーディ訳は "careful

1) 片山 2014, 94, 10.

attention"とするものの²⁾、リス・デヴィッツ訳では"thinking according to law"となっている³⁾。さらに同じ文脈が『ディーガニカーヤ』にも登場するが⁴⁾、岡野訳ではその箇所を「根源的に思惟すると、」と訳している⁵⁾。

老死の原因を追究するブッダの適切な思惟と智慧によって「生があるとき老死がある」云々と目の当たりにしたのであるから、先行訳が「考察」や「思惟」という訳語で示しているように、この場合の*manasi-Kr*は思考を表していると考えられる。さらに『ミリンダパンハー』を参照すると、

「大王よ、麦を刈る者が左手で麦の束を掴んで、右手で鎌を掴んでから、鎌によって〔麦の束〕を断つように、大王よ、まさにそのように、瞑想を行う者は*manasikāra*によって心に属するものを掴んでから、智慧によって諸々の煩惱を断ちます。このように、大王よ、掴むことを特性とするのが*manasikāra*であり、断ち切ることを特性とするのが智慧です」

*yathā mahārāja yavalāvako vāmena hatthena yavakalāpaṃ gahetvā dakkhiṇena hatthena dāttaṃ gahetvā dāttena chindati evaṃ eva kho mahārāja yogāvacaro manasikārena mānasam gahetvā paññāya kilese chindati. evaṃ kho mahārāja gahaṇalakkhaṇo*⁶⁾ *manasikāro evaṃ chedanalakkhaṇaṃ paññā ti.* Mil 33, 4-9.

このように*manasikāra*と*paññā*の関係にかんするナーガセーナの解説があり、*manasikāra*とは「掴むことを特性とする」(*gahaṇalakkhaṇo*)と説明されている。ここに「心に属するものを掴んで」(*mānasam gahetvā*)というのは、外界にある物理的なものを掴むのではなく、いわば頭の中で何かを掴もうとする作用を説明しようとして言っているのである。

2) Bodhi 2000, 537, 15.

3) Davids 1922, 6 12-13.

4) DN2, 30, 23-31, 9.

5) 岡野 2003, 41, 2-3.

6) トレンクナー本 (Mil 33, 8-9) では*āhanalakkhaṇo*とある。しかしこの譬えが麦を刈る動作を採用するのは、麦や鎌を掴む行為 (*Grah*) を *manasikāra* の特性として示さんがためと考えるべきであるから、ここはシャム本の読み (*gahaṇalakkhaṇo*) にしたがって読む。cf.

これを先の用例に当てはめて考えると、原文で言う *yoniso manasikārā*（具格）から *paññāya*（具格）の間にも段階が想定され、前者は答えを掴むべく適切に思考を巡らせる段階を示していると考えられる。そして、このようであれば、原文の *yoniso manasikārā* と *paññāya* は「適切な思惟と智慧によって」と並列で理解するのではなく、「適切な思惟を通じて、智慧による」と理解して、「生があるとき老死がある。生を縁として老死がある」と、ブッダが目目の当たりにするまでを段階付けて考えることもできる⁷⁾。

2. 2 注意を表す用例

次に確認するのは *manasi-Kṛ* が注意を表す用例である。特にブッダが教えを説く前の定型句は数も多く、我々にも馴染みのあるものとなっている。

ゴータマさん、私は人を賤しい人とする条件をも知っていないのです。どうか、わたくしが賤しい人を賤しい人とさせる条件を知り得るように、ゴータマさんはわたくしにその定めを説いてください。

バラモンよ、ではお聞きなさい。よく注意なさい。わたくしは説きましょう。

（中村 1963, 32–33）.

na khv āhaṃ bho gotama jānāmi vasalaṃ vā vasalakaraṇe vā dhamme. sādhu me bhavaṃ gotamo tathā dhammaṃ desetu yathāhaṃ jāneyyaṃ vasalaṃ vā vasalakaraṇe vā dhammeti. tena hi brāhmaṇa suṇāhi sādhu kaṃ manasikaroḥi bhā sissāmīti. Sn 21, 16–20.

この定型句は、パーリ語では *sādhu kaṃ manasi-Kṛ bhāsisāmi* となっているが、サンスクリット語では *sādhu ca suṣṭhu ca manasi-Kṛ bhaṣiṣye* と説かれる。引用し

中村 1963 104, fn. 31, BK-III, 102.

7) 本文中に挙げた先行訳の内、ボーディ訳はそうように理解する ("through careful attention there took place in me a breakthrough by wisdom": Bodhi 2000, 537, 16–17)。また如理作意 (*yoniso manasikāra*) と智慧 (*paññā*) と現観 (*abhisamaya*) の関係性についても言及しており (cf. Bodhi 2000, 729–730 fn. 13)、如理作意は智慧に先駆けて起こるものであり、智慧は現観の原因となっているのが經典に一般的な用法であると言う。

た中村訳では「よく注意なさい」と訳されている。この他の先行訳としては、荒牧訳は「正しく思惟するがよい」としているが⁸⁾、村上・及川訳では中村訳と同様の「よく注意しなさい」となっており⁹⁾、英訳としてはノーマン訳が“pay careful attention”と訳している¹⁰⁾。

ブツダの説法が始まる前に説かれるこの定型句は、これから話す内容に十分な注意を向けるよう促すためのものである。注釈では先にある「聞きなさい」(*suṇāhi*) というのは聞く言葉を取り違えないように、そして、「よく注意なさい」(*sādhukaṃ manasikarohi*) というのは話の意味を取り違えないように促していると解説されている¹¹⁾。この用例は經典内に頻出し、經典自身は何ら説明を加えていないが、例えば、『ディーガニカーヤ』における同様の文脈 (*suṇohi sādhukaṃ manasikarohi* : DNI 62, 20–21) を解説したブツダゴーサは、この場合の *manasi-Kṛ* を「牽引」(*āvajja*)、「集中」(*samannāhārā*)、「不散乱」(*avikkhitta*) の語で説明している¹²⁾。いずれの語で理解するにせよ、ここでは対象に向けて心を引きつけ、注意することを意味しているのである。

以上、本文中では代表例を示しただけであるが¹³⁾、一般的な *manasi-Kṛ* の訳

8) 荒巻 2015, 47, 11.

9) 村上 1986, 433, 15.

10) Norman 1985, 20, 19.

11) Pj2 176, 26–177, 1.

12) Sv1 171, 24–25.

13) 思考を表す用例として他に、

「思惟されるべき、それら諸法を思惟しない」(*ye dhammā manasikarāṇṭyā te dhamme manasikaroti*: MN1 7, 23–24)、「比丘たちよ、私にとって〔比丘たちが争っている〕その方向は、考えることだけでも不愉快だ」(*manasikātum pi me eṣā bhikkave diṣā na phāsu hoti*: AN1 275, 15)、「立ち上がるという想念を心に為して (= 立ち上がることを考えて)」、「*uṭṭhānasāññaṃ manasikaritvā*: AN1 114, 15. etc.」、DN3, 212, 19. etc., AN2, 165, 20, MN1 41, 21 etc., DN1 12, 13 etc., MN1 298, 2–3 etc., MN3 161, 12–13などを参照。

注意を表す用例として他に、「〔老いの支配によって〕諸仏の教えに注意を払うことが容易でなくなる」(*na sukaraṃ buddhānaṃ sāsanaṃ manasikātum*: AN3 103, 9–10, etc.)、「偉大な王よ、〔その人の〕性質は一緒に暮らすことよって知られるのである。……注意している者によって〔知られる〕のであって、注意していない者によっては〔知られ〕ない」(*saṃvāsena kho mahārāja śīlaṃ vedittabbaṃ* [...] *manasikarotā no amanasikarotā*: SN1 78, 25–27)、「眼に注意を払わず、色に注意を払わず……」(*na cakkhuṃ manasikareya, na rūpaṃ manasikareyya*: AN5 321, 12–13)、AN1, 256, 29–30, AN1 282, 16–17, AN4 57, 4–10, MN1 53, 11 etc.などを参照。

としては、大きく二つに分けて、「思惟」あるいは「注意」といった訳語を想定することができる。また、リス・デヴィッツは、*manasi-Kṛ*は思惟 (thought) を意味し、後代に注意 (attention) を意味する語に特化したという興味深い指摘を行っている¹⁴⁾。

2. 3 諸定義

経典に引き続いて、アビダルマ論書を参照しながら、*manasi-Kṛ*がどのように解説されているのかを見ておく。主に *manas (i) kāra* (作意) として定義される箇所を参照することになる。一般的によく知られているのが『アビダルマコーシャ』にみる定義である。以下にヤショーミトラの解説と共に参照する。

「*manaskāra*は心を〔所縁に向けて〕曲げること」とは、所縁に向けて心を引きつけることであり、〔所縁に向けて心を〕定めるという意味である。心の作者 (*manasaḥ kāro*) が *manaskāra* である。あるいは心を為す (*mano vā karoti*)、引きつけさせるのが *manaskāra* である。

manaskāraś cetasa ābhoga (AKBh 54, 22) *iti ālambane cetasa āvarjanaṃ. avadhāraṇam ity arthaḥ. manasaḥ kāro manaskāraḥ. mano vā karoty āvarjayatīti manaskāraḥ.* AKVy 127,33–128,2.

『アビダルマコーシャ』には「*manaskāra*とは心を曲げること」(*manaskāraś cetasa ābhoga*) としか書かれていないが、ヤショーミトラはこれを解説して、「所縁に向けて心を引きつけること」(*ālambane cetasa āvarjana*) であるとしている。つまりこれは、物音がした際にそちらへ注意を向けるような作用を指して言うのであり、この法が十大地法に分類されていることから、我々の日常ではたらく注意作用として理解されていることがわかる。さらに、ヤショーミトラは複合語の解釈を行っているが、前分の *manas* にかんして、属格や対格に解釈する

14) Davids 1922, 6, fn. 1: "*Manasikāro*, thought, came to have the specialized meaning of 'attention' in later books only."

例は挙げているものの、於格を用いた解釈は行なわない。一方、南伝の論書では以下のように於格で解釈する。

心に対してはたらく者 (*manamhi kāra*) というのが *manasikāra* である。こ〔の *manasikāra*〕は〔所縁に向けて〕行かせることを特徴とし、相応した〔諸の心〕を所縁と結ぶことを働きとする。〔*manasikāra*は〕所縁と向かい合った状態で現れ出るものであり、所縁を足場 (= 直接の因¹⁵⁾) として〔現れ出る〕ものであり、行蘊に含められる。所縁への到達を為す者という点で、相応した〔諸の心〕にとって御者のようであると見られるべきである。

manamhi kāro ti manasikāro. so sāraṇalakkhaṇo sampayutthānaṃ ārammaṇe saṃyojanaraso ārammaṇābhimukhabāvapaccupaṭṭhāno ārammaṇapadaṭṭhāno saṅkhārakkhandhaparyāpanno ārammaṇapaṭipādakattena sampayuttānaṃ sārathī viya daṭṭhabbo.

Vism 466, 29–33.

南伝は北伝の論書とは異なって、あくまで *manasikāra* という格付き複合語として解説する。この複合語を於格で解釈すること自体には何の特異性もないが、*manasikāra* とは心を所縁という目的地へと到達させる者であり、*manasikāra* と相応する心にとって「御者」のようであると説明することから、この場合の於格にかんしては「心に対してはたらく者」(*manamhi kāro*) といった意味で理解すべきであって、実際のところ、ヤショーミトラが解説する属格での解釈 (*manasaḥ kāro*) と近い意味合いで理解されている。したがって、この箇所では¹⁶⁾、於格の基本的機能ともいえる「心の中に/上に」といった動作の場所を表す意味では理解されていないと考えなければならない。いずれにしても、諸

15) cf. BK-III xv.

16) プッダゴーサはこの他の解釈の可能性も示している。それはつまり「心を為す」という解釈であり、「以前の心と異なる心を為すことも *manasikāra* である」(*purimamanato visadisam manam karotīti pi manasikāro*: Vism 466, 26–27) と解説する。こちらの解釈は、本文中のヤショーミトラが示した対格での解釈 (*mano vā karoty*) に近い意味合いで理解されていることになる。

定義から見限り、北伝南伝の別にかかわらず、アビダルマにおける *manas* (*i*) *kāra* とは、心を対象に向かわせる注意作用をもった、一つの法として理解されているのである。

3 考察対象となる記述

一般的な *manasi-Kṛ* の用例を確認したところで本題に入る。本稿では、《般舟三昧經》に出る、以下のような記述に見る *manasi-Kṛ* の意味を検討することになる。本稿では一例だけの引用となるが、この他に PSS 3A, 3D, 3E, 3H, 3J, 8A, 8B に見る用例も今回の考察対象に含まれる¹⁷⁾。

バドラパーラよ、菩薩は在家者であっても、あるいは出家者であっても、ひとり閑かな場所に向かい、座ってから、如来、阿羅漢、正等覺者なる阿弥陀仏を、聞いた通りの (**yathāśruta*) あり様に従って *manasi-Kṛ* する。そして戒蘊に過失なく、注意力を乱すことなく、一昼夜、あるいは二〔昼夜〕、あるいは三〔昼夜〕、あるいは四〔昼夜〕、あるいは五〔昼夜〕、あるいは六〔昼夜〕、あるいは七昼夜のあいだ *manasi-Kṛ* するべきである。そ〔の菩薩〕がもし七昼夜のあいだ心を乱すことなく阿弥陀如来を *manasi-Kṛ* するならば、まさしくそ〔の菩薩〕は七昼夜が満ちてから世尊、阿弥陀如来を見る。

17) 般舟三昧の実践以外も含めると、用例は經典中に33例ほど見いだせるが、そのほとんどは思考を表す (cf. 1R (1), 8G, 14D, 15K, 15L, 18G, 24D, 24E, 24H, 25A)。残りの数例は注意に分類される (cf. 1R (2), 2D)。また仏隨念の説明 (3F) とその譬え (3I) にみられる *manasi-Kṛ* にかんしては今回の考察と同じ結果があてはまる。《般舟三昧經》では般舟三昧も仏隨念も同じく仏を *manasi-Kṛ* するよう説く。それゆえ、一見すると、般舟三昧と仏隨念は同一概念のように思われがちである。どちらも同じく見仏と結びつくため、行為そのものに違いが生じるわけではないが、しかし、吹田 2021において説明したように、未だ見ぬ他方仏を最初にイメージ化する段階が般舟三昧であり、その後の記憶に基づいて実践する時点から仏隨念となるのである。我々は見たことのある物事しか思い出すことはできない。未見のものを思い出す (= 隨念する) と言わないのと同様であって、般舟三昧と仏隨念は先立つ記憶の有無によって区別されなければならない。

*bzang skyong/ byang chub sems dpa' khyim pa 'am rab tu byung ba yang rung
gcig pu dben par song ste 'dug la/ de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par
rdzogs pa'i sangs rgyas tshe dpag med ji skad du thos pa'i rnam pas yid la byas tel/
tshul khrims kyi phung po la skyon med cing dran pa g-yeng ba med par nyin zhag
gcig gam/ gnyis sam/ gsum mam/ bzhi 'am/ lnga 'am/ drug gam/ nyin zhag bdun
du yid la bya'o// de gal te nyin zhag bdun du sems mi g-yeng bar de bzhin gshegs
pa tshe dpag med yid la byed na/ de nyin zhag bdun yongs su tshang ste 'das nas/
bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa tshe dpag med mthong ngo// de gal te nyin mo
bcom ldan 'das ma mthong na/ de nyal ba'i rmi lam du bcom ldan 'das de bzhin
gshegs pa tshe dpag med de'i zhal ston to//* PSS 3B.

このように般舟三昧の実践としては仏を*manasi-Kṛ*¹⁸⁾することが説かれる。
先行訳として、梶山訳では「心を集中する/心を注ぐ/憶念する」と順に訳し

18) 《般舟三昧經》の原典は断片的に現存するのみであり (cf. Hoernle 1916, Harrison et al. 2018)、今回の考察に資する主な資料はチベット語訳となる。したがって**manasi-Kṛ*として還梵扱いとすべきであるが、*yid la byed pa*が*manasikāra*の定訳である点 (cf. MVP 1680, 1926, 1641)、さらに吹田 2017で明らかにしたように、同じ思想系列に属する臨終見仏が仏を*manasi-Kṛ*するよう説く点、それらに加えて、般舟三昧から展開したと考えられる一行三昧 (*ekavyūha-samādhi*) も同じく仏を*manasi-Kṛ*するよう説いている点に鑑みて、原語が*manasi-Kṛ*であると断定する。臨終見仏の詳細にかんしては吹田 2017に譲ることとして、ここでは一行三昧を参照しておく。一行三昧が見仏に関連することもさることながら、その説示内容は般舟三昧と類似することが知られている (cf. 林 2004)。つまり、一行三昧の説明には般舟三昧と共通の用語が用いられていると考えられ、そこから*manasi-Kṛ*という原語を回収することができる。

一行三昧に入門しようと思う善男子あるいは善女人は、寝所や座所を別々にしなければならない。そして〔その者は、人との〕交流を喜ばないようにしなければならない。……そして〔その者は〕かの〔如来の〕名前を把握しなければならない。その名前を聞いて認識した後、その如来がおられるその方向を向いて座り、その如来を*manasi-Kṛ*しなければならない。

ekavyūhaṃ samādhim avatartukāmena kulaputrena kuladuhitrā vā viviktāni śayanāsanāni kartavyāni asaṃsargārāmena ca bhavitavyam [...] tasya nāmadheyam gṛhītavyam tac ca nāmadheyam śrutvopalabhya yasyaṃ diśi sa tathāgatas tām diśaṃ āmukhīkṛtya niṣṭḍitavyam, tam eva tathāgataṃ manasikurutaṃ.* ŚŚP 134, 33–39. *em. ŚŚP: *manasikurvataṃ*.

分けており¹⁹⁾、林訳は「思念する」²⁰⁾、そしてハリソン訳では“concentrate”と英訳されている²¹⁾。

しかし《般舟三昧經》では、「その者は何度も *manasi-Kṛ*することによってかの仏を見る」(*de phyi phyir zhing yid la byed pas de bzhin gshegs pa de mthong ngo*: PSS 3E) と説かれるように、内容が見る行為と結びつくことを考慮すると、「作意」はもちろんのこと、先に確認したような「思惟」あるいは「注意」といった一般的な訳語や、先行訳のような「集中」や「思念」などを訳語にあてはめたのでは、実践の具体的内容にまで迫ることができない。したがって、これらの訳語では不十分であり、検討の余地があるのである。

検討を加える上で押さえておきたいのが、上記の記述に見られる「聞いた通り」(**yathāśruta*) という表現である。これは既に Harrison (1978, 44) が指摘するように、仏の視覚化 (visualization) にかんする当時の実態を知る上で貴重な表現となっており、直接目で見る媒体が存在せず、仏の具体的なあり様を人から伝え聞いて行う実践であったことを推測させる。つまり、問題の *manasi-Kṛ* とは、聞いた情報に基づいて行う、視覚化にかんする内容をもつ行為であるということになる。

4 「心の中に作る」ということ

《般舟三昧經》は様々な譬えを用いて般舟三昧を説明する。次に引用する娼婦の譬えは、般舟三昧と仏随念の関係性や、修道論上の役割を示唆するとして、吹田 (2016/2021) に引用したが、*manasi-Kṛ* の意味を検討する上でも有効である。特に今回は、譬えに登場する男たちの行為内容に立ち入ってみたい。

バドラパーラよ、例えばある男がラージャグリハ大都城に住んでいるとしよう。そしてヴァイシャーリーの町に、スマナー (**Sumanā*) と呼ばれる、

19) 梶山 1992, 271, 3–7.

20) 林 1994, 20, 6–10.

21) Harrison 1990, 32, 9–18.

ある娼婦がいると聞いた。二人目の男は、アームラパーリー (**Āmrāpālī*) と呼ばれる、ある娼婦がいると聞いた。三人目の男は、ウトパラヴァルナー (**Utpalavarṇā*) と呼ばれる、かつて娼婦〔だった女性〕がいると聞いた。かれらは彼女たちのことを聞いて、それぞれがそれぞれ〔の女性〕を恋慕したのだが、その男たちはその娼婦たちを見たことがなく、ただ名前と容姿と肌の色を聞いただけで愛欲の心を生じたのである。かれらが何度もそ〔の娼婦〕を心の中に作っている (*manasi-Kṛ*) 間に眠りに落ちると、夢のなかで「我々はその娼婦たちのところに来ているのだ」と知る。その男たちはのラージャグリハ大都在て、以前眠りに落ちていなかった時にそれぞれ愛欲を伴った心を生じていたが、同じようにその男たちは眠ってから夢のなかで「愛欲を伴った心を生じ」、その娼婦たちを見て、それぞれの相手と一緒に欲 (**maithuna-dharma*) にふけてから、交わりに対するその欲望から解放されたのを夢にみたのである。.....かれらは目覚めてから、見、聞き、知り、理解した通りに夢での経験を思い出す (**anu-Smṛ*)。

zang skyong/ 'di lta ste dper na skyes bu zhig rgyal po'i khab kyi gron khyer chen po na 'dug pa las yangs pa can gyi grong khyer na smad 'tshong ma yid bzang zhes bya ba zhig yod par thos sol/ skyes bu gnyis pas ni smad 'tshong ma a mra skyong zhes bya ba zhig yod par thos sol/ skyes bu gsum pas ni sngon gyi smad 'tshong ma u tpa la'i mdog ces bya ba yod par thos sol/ de rnams kyis de dag thos nas so sor so so la sems chags par gyur mod kyi/ skyes bu de rnams kyis smad 'tshong ma de rnams mthong ba ni ma yin te/ ming dang gzugs dang kha dog tsam zhig thos pas 'dod chags kyi sems skyed par gyur tol/ de dag phyi phyir zhing de yid la byed bzhin du nyal ba dang/ rmi lam du yang smad 'tshong ma de dag gi drung du bdag cag dong ba snyam du shes te/ ji ltar skyes bu de dag rgyal po'i khab kyi grong khyer chen po na 'khod cing sngon ma nyal bar de lta de ltar 'dod chags dang ldan pa'i sems bskyed pa de bzhin du skyes bu de dag nyal nas kyang rmi lam na smad 'tshong ma de dag mthong zhing phan tshun sprad de/ 'khrig pa'i chos la bsten nas/ 'khrig pa la dad pa de dang yang bral bar gyur pa yang rims

*so// [...] de dag sad nas ji ltar mthong ba dang/ thos pa dang/ shes pa dang/ rtogs
pa'i rmi lam na myong ba rjes su dran nas/* PSS 3D.

今回の考察の焦点は、「そ〔の娼婦〕を*manasi-Kr*している」という男たちの行為を、どのように理解するかという点にあるが、上記の拙訳にも示したように、これを「そ〔の娼婦〕を心の中に作っている」と理解する。

まず、「その男たちは娼婦たちを見たことがなく」とあるように、男たちは一度も娼婦を目にしたことがない。したがって、譬えに登場する男たちは、耳で聞いた内容（容姿や肌の色）に基づいて行為を行っていることになる。そして、娼婦を見ることを目的に行うのだから、内容は視覚化にかんするものである。これらの点に加えて、その行為の原語が*manasi-Kr*である点を考慮すると、譬えに登場する男たちは、聞いた情報に基づいて、見たいと望む娼婦を心の中に（*manasi*）作っている（*Kr*）と理解することができるのである。

この譬えは、遠く離れた別の世界に住む仏に、一目会いたいと熱望する衆生を、娼婦に思いを寄せる男に譬えたものである。したがって、娼婦を*manasi-Kr*するというのが、仏を*manasi-Kr*するという般舟三昧の実践、夢見が定中と対応し、その状態から出て思い出す（＝随念する）までの過程を説いていることになる²²⁾。つまり、この譬えに登場する男たちの行為は、般舟三昧の実践にそのまま還元することができ、これを還元すると、その実践というのは仏を心の中に作ることを意味することになるのである²³⁾。

22) cf. 吹田 2021, 169–172.

23) 文法的な観点からすると、*manasi-Kr*の前分である*manasi*を、対象を作る場所としての於格に解釈する。於格をこのように理解することは最も基本的といえるが、特に北伝の論書にみるように、*manas* (*i*) *kāra*を解釈する場合には稀となっているようである。ここでは理解に資する資料として、チャンドラキールティの《中観五蘊論》からその解釈例を参照しておく。*manaskāra*の項目（MPSk D ya 246a4–7, P ya 281b6–282a3）を参照すると、

心を作るから**manasikāra*であり、ある対象に心を留めさせるという意味である。あるいは対象を心の中に作るから**manasikāra*であり、その力によって識が対象を心の中に作ることを自性とする。cf. BK-IV 103–104, 横山 2021, 68–69.

yid la byed pas na yid la byed pa ste/ yul 'ga' zhiḡ la sems gnas par byed pa zhes bya ba'i don nam/ yul yid la byed pa na yid la byed pa ste/ gang gi stobs kyis rnam par shes pa yul yod la byed pa'i ngo bo nyid do//

5 おわりに

以上、般舟三昧の実践に用いられる *manasi-Kṛ* は「心の中に作る」という意味で理解する。そして、このように理解することによって、当時の行者は、他方仏の姿かたちを耳で聞き、その情報に基づいて仏を心の中に作ろうとしていた、という般舟三昧の具体的な実践内容が浮かび上がってくるのである。

manas (i) -Kṛ の語は、主に瑜伽行派の文献において重視され、複数の作意 (*manaskāra*) が説かれることから、冒頭で触れた Deleanu (2006) 以外にも、近年では Jowita (2018) などによって取り上げられ、この語の意味するところが注目されている。多義的な語を理解しようとする場合には、できるだけ多くの用例を見ていく必要がある。今回検討を加えた *manasi-Kṛ* にかんして、「心の中に作る」という訳語自体に特筆すべき点は無いが、それが対象をイメージ化する文脈で用いられる点では特異である。そしてその特異な用例は、後代の文献などではなく、《般舟三昧經》のような初期大乘經典に垣間見ることができるのである。最後に、今回の考察結果を踏まえた拙訳を示しておく。

バドラパーラよ、菩薩は在家者であっても、あるいは出家者であっても、ひとり閑かな場所に向かい、座ってから、如来、阿羅漢、正等覺者なる阿弥陀仏を、聞いた通りのあり様に従って心の中に作る。そして戒蘊に過失なく、注意力を乱すことなく、一昼夜、あるいは二〔昼夜〕、あるいは三〔昼夜〕、あるいは四〔昼夜〕、あるいは五〔昼夜〕、あるいは六〔昼夜〕、あるいは七昼夜のあいだ心の中に作るべきである。そ〔の菩薩〕がもし七昼夜のあいだ心を乱すことなく阿弥陀如来を心の中に作るならば、まさしくそ〔の菩薩〕は七昼夜が満ちてから世尊、阿弥陀如来を見る。

とある。まず最初に「心を作るから...」と解釈しているのは、本文中にみたヤショーミトラの解説にあった「あるいは心を為す」(*mano vā karoti*) と同じく、複合語の前分を後分の対象として理解したものであるが、その次に「対象を心の中に...」と解釈しているのは、前分の *manasi* を動作を行う場所として理解していることがわかる。般舟三昧の場合にもこれと同様に解釈されるべきである。

略号

- AKBh *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*, ed. P. Pradhan. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1967.
- AKVy *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā* by Yaśomitra, ed. U. Wogihara, Sankibo Buddhist Book Store, Tokyo, repr., 1989 (1936).
- AN *Aṅguttara-Nikāya* (Pali Text Society Edition).
- BK-III 榎本文雄ほか『ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語: 仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集 バウッタコーシャIII』(インド学仏教学叢書 17) 山喜房佛書林, 2014.
- BK-IV 宮崎泉ほか『『中観五蘊論』における五位七十五法対応語: 仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集 バウッタコーシャIV』(インド学仏教学叢書 20) 山喜房佛書林, 2017.
- D デルゲ版.
- DN *Dīgha-Nikāya* (Pali Text Society Edition).
- MN *Majjhima-Nikāya* (Pali Text Society Edition).
- MPSk *Madhyamakapañcaskandhaka*, D (3866) ya 239b1–266b7, P (99) ya 273b6–305b5.
- MVP *Mahāvīyūtpatti*, 榊亮三郎編『梵藏漢和四訳対校 翻訳名義大集』真言宗京都大学, 1916. [再版 国書刊行会, 1981].
- Mil *Milindapañha* (Pali Text Society Edition).
- P 北京版.
- Pj *Paramatthajotika (Majjhima-nikāya-aṭṭhakathā)* (Pali Text Society Edition).
- PSS *The Tibetan Text of the Pratyutpanna-Buddha-Saṃmukhāvasthita-Samādhi-Sūtra*, (Studia Philologica Buddhica Monograph Series I), ed. Paul Harrison. Tokyo: Reiyukai Library, 1978.
- Sn *Suttanipāta* (Pali Text Society Edition).
- SN *Samyutta-Nikāya* (Pali Text Society Edition).
- SŚP *Saptaśatikāprajñāpāramitā*, ed. G. Tucci. *Memorie della Classe di Scienze Morali, Storiche e Filologiche*, serie V 17, 1923, pp. 116–139.
- Sv *Sumaṅgalavilāsini (Dīgha-nikāya-aṭṭhakathā)* (Pali Text Society Edition).
- Vism *Vissuddhimagga* (Pali Text Society Edition).

参考文献

- BODHI, Bhikku
2000 *The Connected Discourses of the Buddha: A Translation of the Samyutta Nikāya*, Boston: Wisdom Publications.
- DAVIDS, C. A. F. Rhys
1922 *The Book of the Kindred Sayings (Samyutta-nikāya) or Grouped Suttas Part II the Nidāna Book (Nidāna-vagga)*, London: The Pali Text Society, repr. 1972.
- DELEANU, Florin
2006 *The Chapter on the Mundane Path (Laukikamārga) in the Śrāvakabhūmi: A Trilingual Edition (Sanskrit, Tibetan, Chinese), Annotated Translation, and Introductory Study, Volume I.*, (Studia Philologica Buddhica Monograph Series XXa). Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.

HARRISON, Paul

- 1978 "Buddhānusmṛti in the Pratyutpanna-buddha-saṃmukhāvasthita-samādhi-sūtra," *Journal of Indian Philosophy* 6: 36–57.
- 1990 *The Samādhi of Direct Encounter with the Buddhas of the Present: An Annotated English Translation of the Tibetan Version of the Pratyutpanna-Buddha-Saṃmukhāvasthita-Samādhi-Sūtra*, (Studia Philologica Buddhica Monograph Series V). Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies. [Ph.D. thesis Australian National University, 1980].

HARRISON, Paul, LENZ, Timothy and SALOMON, Richard

- 2018 "Fragments of a Gāndhārī Manuscript of the Pratyutpannabuddhasaṃmukhāvasthitasamādhi sūtra," *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 41: 117–141.

HOERNLE, A. F. Rudolf

- 1916 *Manuscript Remains of Buddhist Literature Found in Eastern Turkestan*. Oxford: Clarendon Press.

KRAMER, Jowita

- 2018 "Concepts of the Spiritual Path in the *Sūtrālamkāravṛttibhāṣya (Part I) : The Eighteen Manaskāras," *Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde* (93) : 269–284.

NORMAN, K. Roy

- 1985 *The Rhinoceros Horn and Other Buddhist Poems (Sutta Nipāta)*, London: The Pali Text Society.

荒牧典俊・本庄良文・榎本文雄

- 2015 『スッタニパータ』講談社.

岡野潔

- 2003 森祖道(編)『長部経典Ⅱ』(原始仏典 第二卷)春秋社.

梶山雄一・末本文美士

- 1992 『観無量寿経 般舟三昧経』(浄土仏教の思想2)講談社.

片山一良

- 2014 『相應部 因縁篇Ⅰ』(パーリ仏典 第三期)大蔵出版.

中村元

- 1984 『ブッダのことば: スッタニパータ』岩波書店.

中村元・早島鏡正

- 1963 『ミリンダ王の問い 1: インドとギリシアの対決』(東洋文庫 7)平凡社.

浪花宣明

- 2012 前田専學(編)『相應部経典 第二卷』(原始仏典Ⅱ)春秋社.

林純教

- 1994 『藏文和訳 般舟三昧経』大東出版社. 2004

- 2004 「般舟三昧経」西蔵訳および漢訳諸本における比較研究(一): 「般舟三昧」"Pratyutpanna-buddha-Saṃmukha-avasthita-samādhi"の語義について』『仏教論叢』38: 93–98.

吹田隆徳

- 2016 「般舟三昧と仏随念の関係について」『印度学仏教学研究』65 (1) : 190–193.

- 2017 「般舟三昧の系譜: manasi-√kṛと見仏」『仏教学会紀要』22: 89–103.

- 2021 「般舟三昧の原様相: 役割の考察から見えるもの」『仏教学会紀要』26: 155–179.

村上真完・及川真介

1986 『仏のことば註（一）：パラマッタ・ジョーティカー』春秋社.

横山剛

2021 『全訳 チャンドラキールティ 中観五蘊論』起心書房.